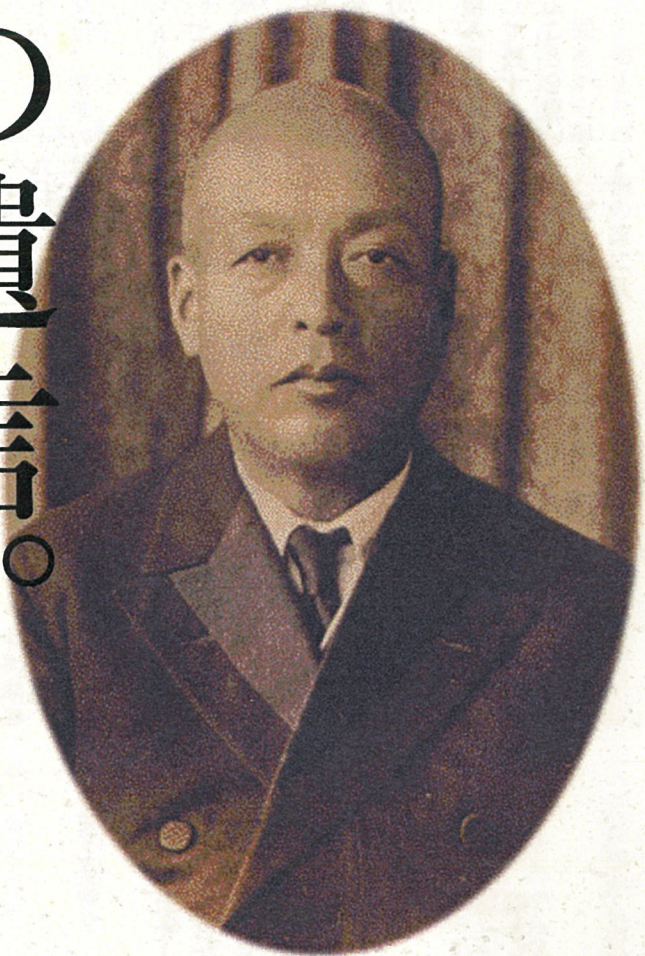


栗原一郎 五十回忌法要 平成十五年五月四日

栗原一郎 五十回忌法要に寄せて



父の遺言。

「私の人生の指針となった、最期の二十日間の思い出」

栗原典夫

はじめに

昭和二十九年三月十九日 午前十一時三十七分。
最後に父は、挙手の敬礼をして家族全員に別れを告げ、この世を去っていきました。

あれから五十年の歳月が過ぎましたが、亡父、一郎が最後の数日間私に語ってくれた人生の指針などについては、私自身、父の寿命（享年六十歳）をはるかに過ぎて生き永らえてきた今に至っても、なお有難く感じており、忘れ難い思い出となっています。

ここに記したのは、その時の、死に臨んでいく父の印象的な態度と言葉です。時代が変わり、世上の価値観も当時と全く異なっていました。二十一世紀の今日において、その善し悪しを云々と申すつもりはございません。

ただ、積み重なる齢とともに衰えていく私の記憶を思うにつけ、あの時、父が私に示した最後の姿を文字として残すことも今、不肖ながらも子としてできる最後の供養ではないかと、拙きを承知の上で筆を執ることを思い立った次第です。

遺言 第一日目

（昭和二十九年三月一日）

父の遺言の始まりは、病の床に臥してから、およそひと月を過ぎた、三月一日の晩からのことです。その日、勤めから帰ったばかりの私を、父は枕元に呼びつけました。

「もう二十日したら死ぬ。紙と鉛筆を持ってこい」、私に遺言するからと言い、それから父は語りはじめました。この日、やはり死にゆく者としての寂しさと無念を感じざるをえなかったのでしょうか。父はボロボロと大粒の涙を流し、約一時間にわたって泣きながら語った「遺言」は、次のようなものでした。

遺言

一、埋める場所

郷里がよく見える所。現在の共同墓地から東奥に入った池の奥、昔我が家の土地だった所に埋めてくれ。それと一緒に、現在、共同墓地の外にある広吉爺さんの墓を移動してくれ。今の持ち主は郷里の大東の西の家だから、よく話して譲ってもらってくれ。

二、遺体

遺体は現在の所（惣爪の借家）から郷里の火葬場まで、一里の距離をリヤカーで運んで焼いてくれ。

三、墓

個人につき、一つずつ建てること。そして私の略歴を墓の裏に入れておくこと。これは、今後結婚その他、家の将来に役立つことがあるだろう。

四、一郎略歴

国学院大学卒業後、東京府立を振り出しに、福島、愛知、高知、岡山と教員をせり。

遺言 第二日目

(昭和二十九年三月二日)

昨日に続き、勤めから戻ると、父は私の帰りを待ち侘びていたらしく、「典夫のこれから先が心配だ」と、次のように話しはじめました。

私（一郎）は、豊かな家に生まれ育ったにもかかわらず、今は、金もなく、女もいない、何一つとして遺すものも無い。すべからく人生は、多かれ少なかれ、時と運命に支配されるものだ。ひよっとすると、人間は「オギャア」と泣いて生まれた時に、一生の運命が概ね決まっているのかもしれない。だから人間は「時」が来たらどんな動き、運の悪い時には、じっとして耐え忍ぶことも必要なのだ。おまえも運の悪い時には、後樂園の芝生の上で青天井を見ながら、時の来るのを待つがいい。無理して動くと、ぬかるみに入り抜けられなくなることもあるから、注意せよ。

おまえは何か事業をする方がいいと思う。きつと、勤めをしても金を残せはしないだろう。また、おまえの結婚は、儂が生きていたなら「この人が良い」と言うこともできるだろうが、死んでいく身だから伝えておく。妻には、とにかく頭の「芯」が良い人を選べ。単に敏いというのではなく、物事の本質を見ようとするような心根の良さが大切なのだ。そうすれば、必ず子供に頭の良い子ができる。それで栗原家の頭を変えて欲しいのだ。

当時、私はまだ二十四歳で、父の心配の種は、まず何よりも私自身の事でした。一度として真面目に勉強することなく社会に出てしまった愚息が、これから先どう食べて行けるのだろうか、本当に心残りだったに違いありません。きつと父は、「とにかく、いま教えてやれる事はすべて伝えておかねば」と懸命に、まさに命を懸けて語ってくれたのだと思います。

遺言 第二日目

(昭和二十九年三月三日)

この日も私の帰宅を待っていましたとばかりに話しかけてきた父ですが、すでにもう水も喉を通らない有様で、吸う息は少なく、吐く息のほうが多く辛そうでした。

これはいよいよ死が近くなりつつあると思います、「書か何か遺して置くものは無いのですか」と思わず尋ねた私に、いわく「何も遺す事は無い、東京裁判で、文官で唯一人処刑になった広田広毅のごとき心境である。『そして淡々として死んで行く』のだ」と父は応じたのでした。

この父の言葉と心境は、今も私の頭の底に残り忘れることができません。また続けて父は、「ほとんどの人は、みんなアクセクと働いて死んでゆくだけだが、そんな人生は送らず、人間らしい生き方をしなさい。旨い物は生きているうちに食べておくべきです。死んだら何も食べられないよ」と、自らの死期の境地から得た、人生の本質についても私に指針を与えてくれました。

「遺言をする」と言ってから、当初の三日間の父の言葉は、その後の私の人生で不思議なほど当り、遺言どおりになっている気がします。

ですから、私の内で父の魂はまだ生きており、この父に守られて幸せに生きて来れた様に思え、今になって有難く感謝の気持ちで一杯です。私は、ちょうど父の享年である六十歳を過ぎた頃より、なんとなくそうした思いを強くして以来、毎月、家で夫婦で作った花を持って墓参りに出向いています。

遺言 第四日目

(昭和二十九年三月四日)

日一日と息が苦しうになつてゐる様に見えるにもかかわらず、父は前日と同じく私に話しかけてきました。ところが、これがまた妙な話なのでした。

実は、ずっと昔に分家に引き受けてもらった筈の、郷里の春次郎さんの家の前の土地三十坪程が、何かの間違ひで誰の名義にもなつていない。これが元で、分家の叔母さんと春次郎さんは喧嘩ばかりしているのであるが、私は春次郎さんにひとかたならぬ恩義があるため、うまく仲裁をすることができなかつたのだ。私が死んだらおまえに必ず言ってくるだろうから、「土地は折半するよう」と言つて」と伝えてくれ。

それから五、六年後だつたと思いますが、私が十日市に家を建てて間もなくの頃、父の言つた通り分家の叔母さんが来られ、件の土地について、「あれは本家の土地だつたのだから、すべて分家のものと認めてくれるのが当然でしょう」と話されました。当分の間、叔母さんは十日市の家へ日参されたのですが、結局、私は「父の遺言だから」と断つてしまいました。本来の道理としては少しおかしい話ですが、これも父の言つた事が不思議に良く当り、その後さしたるトラブルもなく、解決に苦勞せずには終わりました。

郷里では、多くの人に借りばかり作つてしまつた父だけに、この仲裁も自分では思うことが言えず悩んでいたのでしよう。それで私に頼むことで死後、自分の思いを成就させたのです。

遺言 第五日目

(昭和二十九年三月五日)

この日は那須弘之兄さんが見舞いに来て下さいました。弘之兄さんは、ちょうど岡山大学医学部を卒業され、大学病院でインターンとして勤められていたので、父に現在の病状等について色々とご質問されました。

父はこれまでの病気の進行を振り返つて、こう話しました。

病名は「進行性筋萎縮症」という。もう八年程前から右半身の手足がしびれ、次第に手首、足首の間接が動かなくなり、さらに肘の関節、肩の関節と、順に動かなくなり、右半身麻痺の様な体となつた。もう長く右手は肩からぶらりとぶら下がり、物を書く事も、物を提げる事もできないような状態だ。

父はそんな状態にもかかわらず、病床に臥せる当時まで、就実高等女学校へ勤めさせて頂いておりました。病名については、父が懇意にしていた、当時の日赤病院の病院長さんの診察により判明したもので、「あなたの病気は千人に一人の病気だから、原因もわからず薬も無い、死ななきゃ治らない」と言われたそうです。だから父は、その時から死の宣告を受け、覚悟をしていたのでしよう。

弘之兄は診察するのに、縫い針一本で、父の右手にその針を少し刺し、痛いかどうかを聞きました。その時、父は「痛い」と言い、それで弘之兄は「病名は間違いない」と診断され「これは感覚神経は生きていて、運動神経が麻痺しているのです」と私たちに説明をして下さいました。

そして急に弘之兄は、「それでは、叔父さんのために最後の御世話をさせてもらいます」とおっしゃり、それから三月十九日の死の朝まで、私たち一家のあばら屋から医大へと通われ、泊りがけで父の世話をして下さいました。

思いもしなかつた有難い事に、父は大変喜び、弘之兄さんの好意に心の底から感謝しておりました。私もまた、あの時の、返しようがない程お世話になつた恩は、今でも有難く感謝しております。

遺言 第六日目 (昭和二十九年三月六日)

父は次第に衰弱してきた様子で、前日より一層、息の苦しさも増したようです。弘之兄がカンフル注射をして下さり、何とか急激な衰えを防いでいた様でした。

この日父は、「岡山市で戦災に遭って、家を焼かれて郷里に帰った際、色々とか何とかにつけてお世話になった。私はその方々にお礼をする事ができなかった。すまないが、典夫の代で、できるだけのお礼を一生涯かけてしてくれ」と言いました。

一番お世話になったのは、「田中屋」さんだ。風呂の世話から、百姓道具やら、米搗き臼、全ての物を借り、悪い顔ひとつされずとても親切にしてくださいだき、二年もの長い間お世話になった。これでみんな家族が命拾いをした。絶対ご恩を忘れてはならないよ。

春次郎さんからは、畑にしていた昔の自家の屋敷跡を提供していただき、沢山の野菜や芋など作らせてもらった。それから源八さんのお宅には、焼け出されてすぐ、家族七人全員が半年程泊めてもらったりした。分家にも半年泊めてもらった。数えればきりが無い。

部落の方々にも「一ちゃん、一ちゃんと声を掛けられ、お米を分けてもらったり、色んなものを恵んでいただいた。そのおかげで、乞食から立ち上がったのだ」と、生前、父は何度も話していました。私もまた、今もあの当時の乞食生活は忘れる事ができません。さらに、私も父の死後、春次郎さんには、現在の墓地の購入などに際し、一方ならぬお世話をいただきました。

生まれ故郷は本当に良いものです。私は今も盆と暮れの墓参りに際し、お礼の印だけは続けてさせていただいておりますが、あの当時、皆様に助けていただいた事へのご恩返しには、ほど遠いものだと思います。

遺言 第七日目 (昭和二十九年三月七日)

すでに何も食わず、水も喉を通らない毎日が続いていたので、父の言葉もぐっと少なくなっていました。息をすることすらもう苦しそうで、それを苦しくない様にするため、弘之兄さんがカンフル注射を打って下さる。父も「身内に医者がいる事は、とても心強く、有難いものだ」と感謝していましたが、毎朝、弘之兄さんは、ここから大学へ通うだけでも本当に大変なことだろうと、私も、心から頭の下がる思いでした。

この日、父は急に「今までにお世話になった人に、会ってお礼やら、話がしたいから呼んでくれ」と言い出し、「まずは、仲人して下さった水川のおばさんと呼んでくれ」。次に田中屋の叔父さん等、次々に恩義のある方々の名前を挙げるのでした。

それでこの日以来、見舞いに来て下さる方々がだんだんと多くなり、東京から久津間の誠さん、星田から妹尾梁介さん、土屋の叔母さんと、最後の別れをと、沢山の人々が次々に来て下さいました。

また、父の死に近いことを人づてに聞き、郷里の方々も大勢来て下さるようになったのですが、ところが父は懸命に話す人と、押し黙る人がいます。それが不思議で父に尋ねたところ、「昔お世話になった人と、不親切だった人によって、最後の別れ方が違うのだ」と言うのでした。私は、死の間際であろうと、人間の怨念というものは消えぬもののだと、改めて感じ入りました。

「だから、従兄弟同士は仲良くしなさい」と話す父の頭は実にハッキリしているだけに、人生の最後を看取る側としては、なにかと側に付いているのが大変だったと憶えています。

遺言 第八日目

(昭和二十九年三月八日)

この日は、私の連絡を受けた水川のおばさんが、びっくりして飛んで来られ、変わり果てた父の姿を見て涙を流されました。父も、このお見舞いを大変に喜び、早速、過去に数多くの世話をいただいたお礼を述べます。父の結婚の仲人のお礼から、お金を借りて迷惑をかけた事、さらには仕事のお世話までいただいたことなど、側で聞いている私にも、これは、一方ならぬお世話になったのだということがわかります。父が苦しい息の下、休み休みながらも色々と思ひ起し礼を述べる様を見て、なぜか、これが本当に立派な別れと感じました。それまでは何かにつけ、父のことを「クソ親父、ダメ親父」と思っていた私ですが、そんな父の一人の人間としての死に様には脱帽しました。平素の父とは全く違った人間になっている様に見えたのです。

昼からは、母、千歳に「色々と苦勞を掛けて済まなかった」と人生最後の礼を述べると、「黒い便が出たら教えてくれ。人間死ぬ前には黒い便が出るそうだ」とも口にしました。また、私には「モーニングを着て、儂に見せてくれ」と言います。言われた通り、私が目の前で着て見せると、父は、実に満足そうな表情をしました。その時、父の胸に去来したのは、いかなる思いだったのでしょうか。そして父は、私に向かって再度、「人間は生きてる内に、美味しいものを食べておけ、死んだら何も食べられないよ。それから儂が死んでからは、仏壇に何もお供えはする事は無いよ」と語り、「これからにぎり寿司を買ってきてくれ」と言うのでした。今まで水さえも咽を通らぬのに、いったい何を言い出すのかと、私は不審に思いながらも真金の町へ寿司を買いに走りました。ところが父は、なんとその内の二つを食べたのです。驚いている私たちを前に、父いわく「おいしかった。これが人間最後の食欲というものだ」と教えてくれたのでした。

遺言 第九日目

(昭和二十九年三月九日)

いよいよ息をするのが苦しくなってきたのか、大分弱ってきたように見え、注射をする回数も一日事多くなっており、もう、ただ苦しさを抑えるのに必死でした。晩は弘之兄がいるから安心でしたが、日中は、私たちはどうしてやれば良いのかわかりません。弘之兄と相談の結果、昼間は父が苦しくなったら、昔看護婦見習いに行った経験がある杉子姉が注射を打つ事になりました。

父は肺炎を併発したように思えました。そこでこの日から、見舞いに来た人との話は父が私の掌上にカタカナで文字を書き、私がそれを読み取り、相手の人と話ができるようにしました。しかし掌に書かれた文字はなかなか思うように読めないもので、何度も書いてもらいうちに、やっと少しずつ読める様になってきたのでした。この状態は、以後、父が死ぬまで続きます。

父は最後まで、耳も聞こえるし、目も見える状態でした。まさに死を前に必死で色々なことを話し、伝えんとしていました。私も、自分の死に際をどの様にすれば良いのかと思うにつけ、当時を振り返って、改めて父の偉大さは人間を通り越して、仏か神様のようであったと感じております。

この日は、父の妹の土屋の叔母さんが再度見舞いに来られ、お兄さん心配しないで、葬式代は私が援助するから安心なさい、とおっしゃって下さり、頼りにならない私にかわって父を元氣付けて下さいました。父は、にっこりと笑顔を見せて喜んでおりました。

遺言 第十日目

(昭和二十九年三月十日)

この日も見舞客が次々と見えられたのですが、私は父が掌に書くカタカナを読み取ることに必死の有り様でした。そんな訳で、この日誰が来られてどんな話をしたのか、さっぱり記憶がありません。皆さんが最後の別れをして帰った後、晩に弘之兄さんが医大から戻ってこられ、病状のデータを取られた後、父とこんな会話を交わしました。

「叔父さん、叔父さんの病気は、千人に一人あるか無いかの病気ですので、死後解剖させていただきます、病気の原因を調べさせてもらえませんか」

「死んだら痛くもなんとも無いのだから、医学の為になるのなら、どうぞ」

「それでは明日、医大で手続きをしておきますので、遺体もあちらから手配して迎えに来ます。解剖は二十四時間以内にしないとだめですので、解剖が終わったら、医大の方で火葬もさせていただきます」

弘之兄のこの提案のおかげで私は大助かりでした。金がないため「郷里の火葬場までリヤカーで運んでくれ」という父の遺言もこれで実行する必要がなくなりました。死後の処置まで弘之兄さんに助けてもらい、今思えば本当に情けない話です。いくら感謝しても足りないと思っております。

父の死後、解剖の際には、土屋の叔父さんから「典夫、この解剖はとても参考になるものだよ。普通は身内には見せられない事になっているのだが、弘之さんがいるので、特別に見せてもらえるのだから、ぜひ行きなさい」と言われ、実際にこの目で見て参りました。医大からは、その時の解剖所見として文書を頂いております。

第十一日目以後

(昭和二十九年三月十一日～十八日)

十一日目からは、日を追って苦しさを増す呼吸とともに、注射の回数も増え続けました。とにかく少しでも苦しさを和らげてやれないかと、私たちも必死でした。父は、身体全体がしんどいようで、特に足を擦ってくれと言います。母が一所懸命に擦り、交代で子供たちも擦りました。

そんな日々が続くなか、十七日の夕方、父が私を呼び、掌に書いたのが「近所に内緒で、死ねる注射を打つように、弘ちゃんに頼んでくれ」という悲痛な文字でした。そんなに苦しいのか、なんとかしてやりたいと私も思い、医大から弘之兄が戻るやいなや、早速父の言葉を伝えました。当然の話ですが「医者としてそんな事は絶対にできない」と言われます。弘之兄は、代りに「この薬を買ってきなさい」と紙を渡されました。すぐ薬局に駆けつけ、貰った紙を差し出すと、「こんなに悪いのですか」と店の主人が私に向かって話されたのを、今でもよく憶えています。

父はその注射のおかげで苦しみが和らいだ様子ですが、十八日も重体は変わりなく、家族全員で看護を続けました。苦しくなったら杉子姉がすぐ注射を打ち、それを繰り返します。「人生の最後は、こんなに苦しまねばならないのか」私はそんな思いで、父の姿をじっと見つめておりました。

また私たちは、父が「二十日後には死ぬ」と言い、なぜそんな事を言うのか、と問い質した私に「自分の体は、自分でわかるものだ」と言った父の言葉を思い起こし、本当にそんな事がわかるものだろうか、父の死の予言は当たってしまうのだろうか、実に奇妙な半信半疑の思いを抱きながら、父を見守っていたのです。

臨終 第十九日目

(昭和二十九年三月十九日)

朝八時半頃、弘之兄が医大への出勤前に父に注射しようとする、注射液が入りません。

弘之兄は、「注射液を受け付けない。これは半日持つかどうかかわからない。早速医大へ行つて手続きをしてくる」と言い残し、急いで出かけられました。

後に残った私たち家族のみが見守るなか、みるみると父の呼吸は激しくなっていました。しかしながら、私たちにはどうする事もできません。ただひたすら見守るのみです。

午前十一時頃、父の弟である東京の駿叔父から電話が入り「今岡山駅に着いた。これからすぐ行く」と連絡がありました。すでに昨日、駿叔父から「これから東京を発つ」と連絡を受けていた私は、これで行くのか、駿叔父も父に会ってもらう事ができると思いました。

しかし父の呼吸は、ますます吐く息が多く、吸う息はみるみる少なくなっていくきます。私は、駿叔父と父にぜひ会ってもらいたく、「元氣を出して頑張つて」と頼み抜きながら、とにかく何でもいい、できることはないかと、私は父の腕をとり脈拍を測りはじめました。

母も、姉も、妹もみんな父の周りを取り囲むなか、私は父の命を掌で探りながら、「もう少しで叔父さんが来るから頑張つて」と叫び続けていたような気がします。

突然、父は脈をみる私の手から自らの腕を力一杯引き抜き、瞬間大きく口を開け、息を吸ったと思うや、左手で挙手の敬礼を行い、家族みんなに別れを告げました。

同時に、思い切り口を閉じた父の前歯は、激しい音を立てて二本折れ、吹き飛んでしまいました。午前十一時三十七分——。これが父の最期の瞬間でした。

私は、この父の死に様のあまりの見事さに感動し、大声を上げて泣きました。このような立派な死際は誰ばかりできるものではないと、今も敬服しております。

しかし大変残念なことに、その五分か十分後に到着した駿叔父と父は、ついに生きて再会を果たせませんでした。

父の遺言に導かれて

未だに不思議でなりません、「二十日したら死ぬ」という父の死期の予告は、実際は十九日半でしたが、ほぼ的中でした。また今、私のこれまでの人生を思い返しても、父の遺言は当りでした。これは、死を前にして父が、世の中を生きて行く上で自身が苦しんだ事を基に、私が同じ過ちを繰り返さぬよう言葉を尽して導いてくれたためかもしれません。

私は生来、筋道立てて物事を考えるのが苦手な質の上、勉強も苦手です。おまけに人とは少し違う生き方もしたかった。おかげで多くの人から嗤われもしました。ただ、あの日以来、私はいつも父の遺言を頭の片隅に置いて生活をし、私なりに懸命に世の中を泳いでまいりました。すると不思議にも、父の遺言と同じことを人にも言われ、自然と事業などもできました。また、現在も財産はありませんが、悠々と人間的な生活をさせていただいております。

私には、父が最期の二十日間に遺してくれた遺言は今、五十年の歳月を経て素晴らしい「予言」として実を結んだものと感じております。また、親が子を思う掛け値のない気持ちに真に子供に通じた時、その人の魂は子供の命とともに生き永らえ、不思議な力を發揮するものなのだと思います。

もう父を知る人も少なくなりました。私もこの歳まで生きることができ、そして父の五十回忌をできたことも、また不思議に思えてなりません。